特別記事

第53回「わたしの教育記録」

新採・新人賞　受賞作品　全文掲載

「主体的・対話的で深い学び」を成立させるにはどうすればよいか

～スーパーマーケットの店員になって、よりよい売り場を考えよう～

青森県十和田市立三本木小学校教諭　奈良　史

受賞の言葉

この度は、このような賞をいただき、大変うれしく思います。

この実践は、十和田市教育研修センター研究員、社会科班として進めた研究のひとつでした。指導教員である十和田市教育委員会指導課指導主事・二ツ森牧彦先生の御助言と、同研究員である十和田市立東中学校教諭・毛利直樹先生との協議を経て完成しました。この場をお借りしましてお礼申し上げます。ありがとうございました。

私は、いつも子どもの反応を楽しみに授業づくりをしています。教材を見せたときの「お～」と言う声や「わかった！」とか「なるほど！」と言った声は、普段の忙しさを忘れさせてくれるよい響きです。

今回の授業もその声を楽しみに教材研究を行いました。「スーパーマーケットではどうやって商品を並べているのかな？　今日は店員になってもらうよ」「え～っ！」と、授業が始まりました。子どものやる気は45分しっかり続きました。

これからは「主体的・対話的で深い学び」が求められます。子どもの「主体性」と「深い学び」をさらに助長できるよう、教材研究に取り組んで参りたいと思います。そして、子どもの「わかった！」という声を期待して、教師である私も「深い学び」をし続けていきたいと思います。

奈良　史

1．はじめに

新学習指導要領が改訂され、解説が平成29年６月に告示された。以前から注目されていた「アクティブ・ラーニング（AL)」の視点がより明確化され、指導方法の改善が求められた。

新学習指導要領解説社会編「③『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けえた授業改善の推進」には、「イ　授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく、児童生徒に目指す資質・能力を育むために『主体的な学び』、『対話的な学び』、『深い学び』の視点で、授業改善を進めるものであること」と示されている。

私は、初任時代にも３年生を担任したことがある。当時も同じ「はたらく人々とわたしたちのくらし」という単元で研究授業を行う機会があった。見学前の１時間で、「店長さんにインタビューすればわかるね。さて、何をインタビューしたいかな？」という流れの授業である。児童は楽しそうに質問を考え、見学先ではたくさん質問し、スーパーマーケットのひみつは理解できたように思えた。が、新学習指導要領で求められている「主体的・対話的」で「深い学び」のある授業展開であっただろうか。

これは､新学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」が成立するにはどうすればよいか、再び３学年の担任となった昨年度１年間をかけて研究し、実践した記録である。

2．単元について

本単元は「スーパーマーケットで働く人々は、お客さんが買い物をしやすくするために、様々な努力をしている」ことを理解することが大きなねらいである。

実際にスーパーマーケットで働く人に事前インタビューをすると、次のような答えが返ってきた。

1　安心安全な品質管理
2　買い物のしやすい売り場の商品の並べ方
3　目を引く宣伝のしかた
4　地域に密着した移動スーパーの活用

しかし、児童へのアンケートで「スーパーマーケットが工夫していることは何でしょう？」という質問に対しては、「商品をたくさん売っている」「お惣菜を売っている」など、普段買い物に行っている範囲でわかるような回答ばかりであった。

つまり、指導にあたっては、チラシ、店内の写真資料や生活圏の地図などの基礎的資料をもとに、スーパーマーケットで働く人々にインタビューをしたり、実際に店舗を見学したりするなどして、既習事項と結び付けながら学習を進めていくことが必要だと考えた。また、買い物経験がさほど多くはない３年生の児童に、主体的に学ぶ意欲をもたせるには、どんなしかけを作っていくのかが重要な視点である。

3．単元指導計画

（1）つかむ

まずは、各家庭がどんな買い物をしているのかを知るため、１週間の買い物調べを行った。家庭での買い物のレシートをワークシートに貼ったり、ノートに記入したりした。児童にとっては意外な発見が多く、家庭の消費生活を見ることができた。また、利用している店舗をグラフに示すと、コンビニや商店よりも近所のスーパーマーケットの利用率が高く、人気があることがわかった。

（2）予想する

次に、なぜスーパーマーケットが人気なのか予想する声が上がってきた。すかさず次時に写真資料を数枚提示した。

〈資料１　ハロウィンのお菓子の陳列棚〉

C：ハロウィンの看板があるよ。
C：お菓子が山のように積んである。

〈資料２　精肉コーナー〉

C：お肉だけでまとまっている。
C：焼き肉のたれがある。

〈資料３　スーパー入り口〉

Ｃ：ポイントカードを作っている。
Ｃ：この日はポイント４倍だ。

どうすれば確かめられるかを問うと、本で調べる、インターネットで検索する、電話する、インタビューするといった手段が挙げられた。

（３）調べる

近所のスーパーマーケットでは見学依頼を快く受けてくださり、実際に行くことができた。

見学では、店長の方に説明をしていただき、たくさんのことをインタビューすることができた。

Ｃ：売っている品物ごとに看板がつけられていて、わかりやすかったです。
Ｃ：季節ごとの商品を売っていて、ほしくなりました。
Ｃ：商品の棚の奥が、鏡になっていることにびっくりしました。
Ｃ：「お客さんに感謝されることがうれしい」ということを聞くことができて、うれしかったです。

等の感想が出された。

（４）まとめる

見学してわかったことについて、Ａ４大の新聞にまとめた。

児童それぞれが記憶に残っていること、スーパーマーケットについて学習して大切なことを３つ程度の記事に選び、まとめた。

４．本時の指導

身近な買い物調査からの課題づくり、予想、見学、まとめ、と学習を進めていくうちに、スーパーマーケットはたくさんの工夫をしていることが理解できてきた。

では、なぜ工夫しているのかを売り手（働く人々）の立場になって考えることにした。

新学習指導要領の第３学年の内容においても「また、『消費者の多様な願いを踏まえ売り上げを高めるよう、くふうして』いること」を取り扱うことが示された。

私が設けた指導のポイントは、次の２点である。

> ①児童が主体的に思考を働かせる場面をつくる。
> ②学びが深まるような必然的な対話を設定する。

（１）導入

〈資料４　お菓子の棚の提示〉

はじめに、お菓子の陳列棚と本物のお菓子を３つ提示した。そして[?]で３か所隠したうちのどこに３つのお菓子が並べられているのかを考えさせた。この導入は、「陳列には何か秘密があるのかもしれない」ということに気付かせるためのものである。

Ｔ：このお菓子はどこに入るかわかるかな？
Ｃ：わかるー！
Ｔ：じゃあ、理由もわかる？
Ｃ：…わからない。
Ｃ：隣に同じ種類のお菓子があります。
Ｃ：小さい子に向けたお菓子は下にあります。

[?]で隠されたお菓子を他の棚と関連付けて考え始めた。

（２）課題づくり

Ｔ：お菓子の棚には、買う人の年齢とか、並ぶ種類を考えて置いているということだね。
Ｃ：他の商品はどうかな？
Ｃ：だってお肉のときも…。
Ｔ：ストップ。続きを考えてみましょう。

お菓子から他の商品に視点を広げ、次のような課題づくりを行った。

スーパーマーケットでは（実際はスーパー名）どのように商品を並べているのだろう。

（3）主な活動

展開部では、児童を精肉班、野菜班、お惣菜班に分けて、陳列のロールプレイを行った。

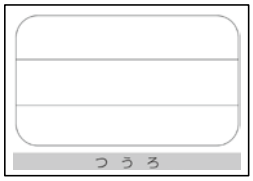
●指導のポイント①　児童が主体的に思考を働かせる場面をつくる。

活動に主体的に取り組むために、具体物を用いて陳列のロールプレイを行う。一人ひとりが活動することで、この後の対話の場面で意見をもてずに対話に参加できない児童が減り、ほぼ全員が意見をもつことができ、積極的な対話へ臨むことができる。

①　自力解決

学級をスーパーの担当の分け方にならって、お惣菜班、野菜班、精肉班の３つのグループに分けた。児童一人に対し、商品のカード９枚とＡ４大の陳列棚のワークシートを配った。

〈資料５　商品カードと陳列棚のワークシート〉



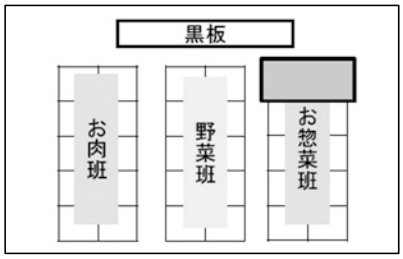
お惣菜班にはコロッケ、手羽先、お弁当、サラダ、ポテトサラダ、トルコライスのお弁当、メンチカツ、パック・輪ゴムを配付。野菜班には、レタス、キャベツ、玉ねぎ、じゃがいも、ドレッシング、サラダ、はくさい、野菜鍋のもとを配付。精肉班には、牛肉、鶏肉（もも）、鶏肉（手羽）、豚肉（地産）、豚肉（国産）、源たれ（地産の焼き肉のたれ）、鶏肉鍋のもと、ソースを配付した。

陳列棚のワークシートには、児童は陳列するうえで気付いたことや気を付けたことを書き始めていた。

〈資料６　児童のワークシート〉

②　共有―対話Ⅰ

〈資料７　同じグループ同士の対話〉

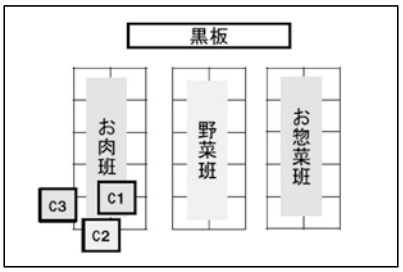


●指導のポイント②　学びが深まるような必然的な対話を設定する。

まずは、同じ種類を陳列している児童同士で対話を行った。ここでは、「ぼくは（棚を見せながら）こうやって並べた。理由は、～～です」という情報交換をメインに行わせた。

③　共有―対話Ⅱ

〈資料８　異なるグループ同士の対話〉



次は、別のグループ同士が交流する。お惣菜班のＣ１、野菜班のＣ２がお肉班へ移動し交流する。

対話Ⅱまでは、自分本位の対話が多く見られた。「ぼくはここに並べました」といったように、情報交換にすぎず、内容が深まったとは言えない。ここで一度めあてに立ち返り「違うグループとどんな共通点があるかな？」と発問してから、交流を行わせた。

すると、「わたしのグループは、同じ種類を近くに置きました」「ぼくは、同じ種類の商品を並べると、お客さんが探しやすいと思います」といったように、陳列についてより一般化された意見が出された。

④　**共有―対話Ⅲ**

〈資料９　iPad を活用して共有〉

最後に、全体で共有した。共有には「Skitch」という iPad のアプリを使い、机間指導中に児童のワークシートを iPad で撮影しておき、提示してポイントを書き込んだり、児童に発表させたりして共有した。

◆お惣菜班

Ｃ：種類が一緒になるように並べる。

Ｃ：パックはカツやコロッケを入れるために近くに置く。

◆野菜班

Ｃ：鍋物の具同士近くに置く。

Ｃ：ドレッシングは玉ねぎやサラダに使う。

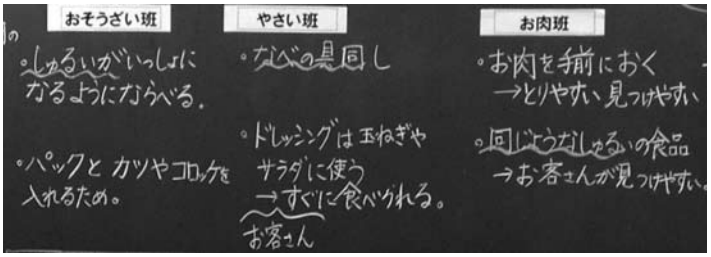
Ｃ：そうすれば、買った人がすぐに食べられる。

◆精肉班

Ｃ：お肉を手前に置く。

Ｃ：同じような種類を近くに置くと、お客さんが探しやすい。

〈資料 10　板書〉



発表し、分類しながら板書していくうちに児童が対話Ⅱに引き続き、共通点を見つけ始めた。

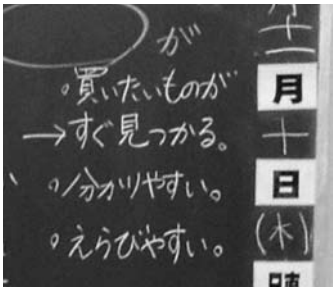
Ｃ：すぐ見つかるようにしている。

Ｃ：わかりやすい。

Ｃ：選びやすい。

Ｃ：通路に近い方が取りやすいよ。

お客さんの視点に立って児童自らが考え始めた。自分のグループだけではなく、友達のグループの陳列にも目を向け、ポイントを探り始めた。



終盤には、「お客さんが」という言葉を使って話し始め、店員の立場から買い手であるお客さんのことを第一に考えながら活動を行うことができた。

⑤　**確かめる**

店長さんへの取材をもとに、パワーポイントでスライド「店長さんのお話」を作成し、児童が話し合った内容を確認した。

> 1．取りやすいかどうか
> お客さんが取りやすいように並べていますか。特に、お惣菜のパックやコロッケ、大きくて重いものなどが手前にあると、お客さんのためになっていいですよ。

> 2．えらびやすいかどうか
> いっしょに買うとよいものは近くにありますか。特に、サラダとドレッシング、ステーキとステーキのたれはいっしょにおくとお客さんにとってえらびやすいですよ。

> 3．わかりやすいかどうか
> これはとても大事です。同じしゅるいのものは近くにありますか。おべんとうどうし、とり肉どうし、緑のやさいどうし……同じしゅるいが近くにあると、お客さんにとってとってもわかりやすいです。

「同じだ！」「あってる！」という言葉が上がった。

⑥　**まとめる**

子どもたちの言葉を使ってまとめを作った。

> スーパーマーケットでは、お客さんのことを考えて、わかりやすくえらびやすいように商品をならべている。

⑦　**振り返る**

本時の振り返りを感想で行った。

Ｃ：商品の並べ方はお客さんがわかりやすいように種類ごとに分けたり、どこにどんな商品があるか看板で示したりして、お客さんへの愛情をこめてやっていることがわかりました。

Ｃ：わたしがもし大人になってスーパーで働いていたら、お客さんのことを考えたいと思います。

Ｃ：商品の置き方が違うだけで、いろいろな見方があるとわかりました。

5．成果と課題

初任者時代の実践では教師が資料を提示し、それに対して児童が反応していった。それでも、子どもたちは見学を楽しみ、思う存分に新聞にまとめ上げた。

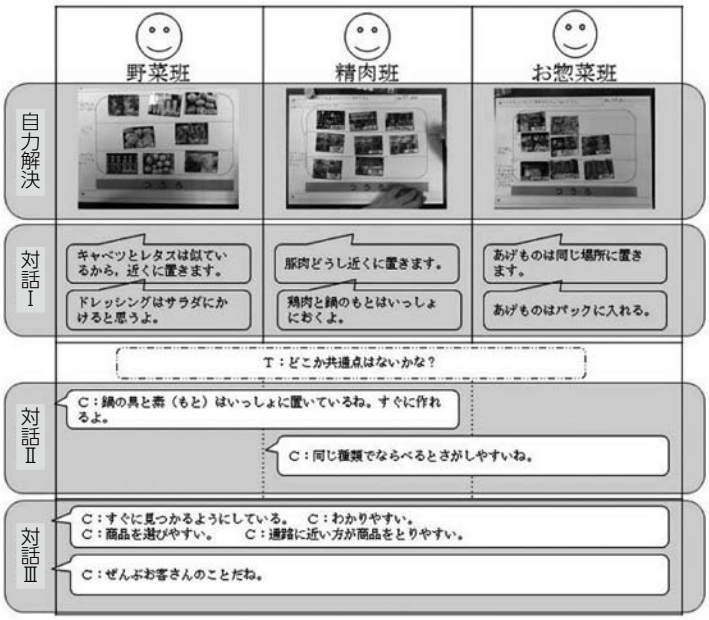
しかし、これから求められていることは、冒頭でも述べたような「主体的・対話的で深い学び」である。

今回の実践をその視点で整理してみる。

まず、対話的で深い学びを成立させるためには、児童が主体的に考え、学習に臨んでいく「足場」をつくることが大切であるということがわかった。本実践では、お菓子の棚を提示し、課題を作り、主たる活動を全児童が行うロールプレイにした。商品のカード９枚×30名分をラミネート加工して用意するのは、時間がかかる。しかし、単元のどこかで、これくらい時間をかけて主体的な学びの礎を、確実に仕掛けておきたいものである。それにより、ほぼ全員が意見をもって（陳列のアイディアをもって）対話に参加できた。

次に、「対話をする必然性」をもつことがいかに重要かである。今回は対話Ⅰ～Ⅲと段階的に設定した。Ⅰは児童同士の情報交換、補助発問を経ての対話Ⅱで深める。対話Ⅲで、本時で学ぶべき内容へ一般化していく流れを設定した。

〈資料 11　対話の流れ〉
はじめは班ごとにばらばらの活動に見えるが、だんだんと友達の陳列が気になり、対話への意欲が高まる。



この３段階で、どの児童にも無理なく取り組むことができたのも、前半を主体的に取り組んだ児童が多かったことに起因していると思う。

《今後の課題》

まずは「主体的・対話的で深い学び」への取り組み方である。日常的な取組には既習事項をいつでも児童が活用できるようにしておくことが重要であると考える。既習事項を教室内に常掲するのもひとつであるし、児童のノートに残して立ち返るくせをつけることも必要かもしれない。繰り返し学習が効果的な分野・科目であれば、基礎・基本の確実な習熟も「主体的・対話的で深い学び」の礎となると考える。今回の単元で言えば、自分で考えた質問、インタビューメモ、まとめた新聞などを手掛かりに、課題解決や対話に取り組むことが考えられる。

さらに、対話を展開するグループづくりやペアづくりも配慮が必要である。単純に隣同士だと情報交換しか成立しない。机間指導等でできるだけ多くの児童の意見を教師が見取り、判断してグループ・ペア編成をすべきだろう。本時の指導では、違う担当のグループ同士と設定していたが、同じグループでも多種多様な意見があれば変更も考えられた。同じ意見同士、違う意見同士、解き終えた児童同士…組み合わせは多種あるが、45分ないし50分の限られた１単位時間にそれを見極めるのは、教師のスキルにかかっていると感じている。

6．終わりに

様々な成果と課題が出たが、何よりも教材開発の楽しさと児童の反応を見たときの喜びがあった。授業の展開を考えたり、アイディアをひねり出したりするのはたいてい教室である。子どもの顔を思い起こしながら反応を期待して教材に打ち込む時間が、幸せでならない。今後も「主体的・対話的で深い学び」の成立を目指し、教材開発と学びに打ち込んでいきたい。

〈参考文献〉
文部科学省「新学習指導要領解説 社会編」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387017_3_1.pdf